

— 次の記事を読んで、後の問いに答えよ。(45点) —

俳優ではない市井の人にとって「定型の感情表現」が入りやすい場所は「共感」ではないだろうか。インタビューセッションをしているとそう感じる人が多い。

共感をあてにして「私のことをわかってほしい」という思いを募らせてしまうと、ともかく自分への注目を目的とした話の運びをするようになるし、聞き手の同意を取り付けるためにさまざまなテクニックを無自覚に用いるようになる。自分の存在の手応えを他人に貪り求めてしまう。そこまでの飢餓感を抱くのは、人間だからこそではある。

そうなるだけの事情も含めて理解はできる。とはいえ、相手の飢えを満たすために私がいるわけではない。まして、そういう念と付き合ってしまうと話がこじれて前に進まず空転してしまう。

だから「^Aそうですねー」と「そうですか?」のあいだを縫うようにした「そうですか!?」で応えるようにしている。「!?」の声音で「わかってほしい」という期待に応えず、かといって「そういうのは良くない」とジャッジもせず淡々と話を聞いているわけだ。

「それは大変でしたね」と共感も高く、エモーショナルな反応を示す方がウケがいいのはわかっている。だけど、それは真摯さに欠けると思ってしまう。何よりその人の声が、音のズレが気になって仕方ないので、そんな態度がとれない。

語る人がひたすら承認されたいという飢えに煽^{あお}られて話す場合、息せき切った切実さがある。だからと言って、ただちにその人の語ることが真実であり、語る内容の重みを物語っているわけではない。

承認を求める飢餓感に引きずられてしまうとは、自我に乗っ取られたままに話すことでもあり、切迫した声の調子に聞こえても、それはその人のありのままというわけではない。むしろ彩りが派手な分だけ、その人らしさを裏切る饒舌^{じょうぜつ}さをもたらしている。それを声のズレとして感じる。

言葉は意味に置き換えられやすい。比べて音として聞こえる声や佇^{たえず}まいのありようは意味ではなく、ただその人の身体の状態を示している。声がズレているとは、「心ここにあらず」ということを示している。その人は「ここ」にいなながら「ここ」にいな

い。その隔たりが私に受け取ってほしい意味として強調される。

私はそのような「意味」を受け取らない。そのため取り付く島がないと感じるかもしれない。かといって相手の言い分を聞かなかったことにするのもない。ただ目の前にいる人間として応じる。そうして私は意味に隠されたその人の意図について尋ねる。言っていることではなく、言わんとしている音に耳を澄ます。

この「耳を澄ます」を抽象的と感じるのだろう。「どのようにすれば耳を澄ますことができますか？」と具体的に聞かれる機会がそれなりにある。

質問の根底に控えているのは、おおむねこうだ。「正しい見解を知ればトレーニングによって能力を身につけられるはずだし、だからノウハウについて尋ねるのは関心の高さの証である」。残念ながらそれは錯覚ではないだろうか。

ノウハウという具体を知ることが興味を持った事柄への接近に思えて、実際はそこから遠ざかるルートを選んでいく。まして耳を澄ますことは、ミラーリングや相手と目を合わせ、熱心に聞く姿勢を示すといった具体的な形やノウハウにすればかなうわけではない。具体性を求めるほど望んだ結果にはならず、虚しい努力になると思う。

「言っていることではなく言わんとしている音に耳を澄ます」とは、澄ますことを通して話を聞くことではないからだ。相手とのあいだに生じた変化によって「耳を澄ましていた」と後でわかるものだ。

聞くことは話すことと分かち難い。その人の言わんとすることを聞いているからこそ、それに応じて出てくる言葉がある。応じるとは考えることではない。やはり意味を追いかけていては遅れてしまう。

なおのことインタビューセッションでいつも気になるのは、話している内容の意味ではなく、その人の身体に馴染^{なじ}んでいない声だ。馴染んでいないとは、先述した音のズレであり、感情の揺れや波が声に出ていると言ってもいい。

そうした起伏は人間らしさの証であるから、感情の揺らぎに乗って話を引き出すのはごく当たり前かも知れない。たしなめたり同情したり共感したりといった手法が有効な人や場面もあるのは間違いない。ただ、そういうやり取りは人情もののドラマ仕立てであり、あくまでエンターテインメントに思える。

ミュージカルのような喜怒哀楽のメリハリの利いた言葉が語られ、涙を流し、あるいは憤慨しと感情を強く伴うほどに、それらが奏でる物語に浸れる人もいるだろう。湧き上がる感情や感覚は嘘ではないけれど、その感情の抑揚がある種の演技になっていると感じられるから、私にはかえって一本調子に観^みえてしまう。かといって淡々とした口ぶりの中にも演技的な抑揚は潜んでいるものだ。

ドラマティックな語りと淡白な語り。^Bどちらも私が引かかるところは音のズレにおいて共通している。何が音をズレさせているのかといえば、それは技巧だ。

冒頭で述べたように、共感への期待をもとにした話の展開に同意を取り付けようとする意図がある限り、それがあつた種の演技になつてしまう。そして、それに付き合う関係性を求めるといったコントロールへの渴望も見え隠れする。だから私は自分が使い慣れた言葉とそれが生まれてくるところを観てもらうために、このように伝える。

^C—あなたは「そのように言うこと」によって何が手に入ると思っているのでしょうか。
^D—それを手に入れることで失つてしまうものがあるとしたら、それはなんでしょう。

「そのように言うこと」は現に話したことではなく、共感や同意を取り付けようとして話したことの動機だ。ある意図のもとに話したのであれば、そこには特定の結果への期待という方向性があつたはずだ。それに従つて話すことによって実際には何が得られたのか。

演技やコントロールといった技巧と意図が本人に無自覚であれば、この尋ね方によつて「自分はどのような立ち位置で、どのような視点で話をしたのか。何がその立ち位置と視点を可能にしているのか」が明らかになつてくる。

そして、「手に入れることで失つてしまうもの」とは何か。話の方向性が絶えず「自分が望ましいと思うような理解を得られる関係性」への期待といったように、最初から決まっているとすれば、いつも「現状の自分を肯定される」という想像通りのことし

か起きないわけだ。それを望んでいるのだから、願いはかなっている。

けれども、そうなる何ともし難いことは起きないという失望を抱えることになる。「私のことをわかってほしい」という期待がかなうほど虚しさが生まれてしまう。失っているのは、未知であり可能性だ。

だとすると、その人が共感を望んで話していることは、必ずしも切実に聞いてほしい願いではないのではないか。共感では届かない、もつと深いところに自覚されない訴えがあるのではないか。

もちろん共感への期待がいつだって悪いのではない。自分の悲しみを額面通り受け入れられて、安心して涙を流す。その甘美さの魅力もわかる。けれどもインタビューセッションという場で設定しているのは、「その人の話をその人の話として聞く」とだ。

たいていの場合、人は相手の話を「その人の話」としてではなく、「自分の話」として聞きがちだ。自分の理解できる範囲の出来事を相手に見出しては「わかる」と言い、共感できないことはただちに「わからない」と判断する。わからなさを前にした途端、実際には口にしなくても、心の中で相手の話に対して「つまり・結局・要するに」を持ち出して解釈することに忙しい。その後続くのは「だから良い・悪い」のジャッジだ。

話している最中に「つまり、あなたの言いたいことは……」という返しが続いて、それが的確だったとして、束の間は「わかってくれて嬉しい」と思うかもしれない。けれども、しばらくすると^{くすぶ}燃える思いが出てくるのではないか。なぜなら相手のしたことは要約であって、決してあなたの思いは最後まで聞かれてはいないからだ。

仮に80年生きてきた人の話を聞こうと思ったら、本当なら80年かけて聞かないといけないはずだ。でもそうはできない。何をどう聞こうとも、その人に届かない歴然とした事実があるにもかかわらず、さらに要してしまっただろう。それよりも大事なのは、ただ話すことをただ聞くことだ。

「その人の話をその人の話として聞く」とは、私が相手の話を聞いて善悪や正誤を決めるのではない。コントロールするのではない。特にコントロールについては鋭敏でありたいと思っている。

都会に住んでいると言葉のやり取りの中で関係性が完結してしまいがちだ。たとえば職場でマウンティングを受けたとしても、本当に身体を用いて組み伏せられたわけではない。マウントを取る人も言葉で優位性を確認し、コントロール願望を満たそうとしている。それへの反撃もやはり同じやり方を試みるだろう。腕力を振るっては社会性から逸脱するから、互いに言葉によって権力関係を競う駆け引きを行う。その結果、身体はともかく精神的に疲労する。

会社や組織で見られる、このようなパワーゲームで交わされる話法に慣れてしまえば、警告の言葉を使ったり、従属を受け入れさせることも次第に「自然」に感じてしまう。

けれども、それが本当に自然かどうかは明らかだろう。身近な社会性を感じる自然と違って、自然環境において支配欲求を満たそうと思っても、雨も風も思いのままにはならない。だから自身の言動もおのずと謙虚にならざるを得ない。

私は山や海に接して暮らしている人たちの話を聞く機会を得たことがある。彼らは人間だけを相手にしたコミュニケーションを重んじておらず、そのため都会に住む人の感性からは、慮りもなく繊細さに欠けるように見える。だが、^Eここでいう繊細さは、互いに言語に依存したゲームを繰り返すためのものではないように思えて仕方ない。

そうした経験を踏まえると、本当は人間も自然の一部であり、誰しも自分の思いのままにはならない存在だということがわかってくる。社会を生きる上でも謙虚さが必要で、そのためには自分の内側に耳を澄ましておかないといけない。そうすると私にできるのは、傲慢にも相手の話の要約をすることでもなければ解釈でもない。まして完璧な理解ではないことだけはわかる。

そのためインタビューセッションはジャッジをせず、ただ完全に聞く場であろうと定めている。^F「完全に聞く」とは相手を完璧に理解することではない。わがらうと試みる状態のことだ。

そういう時間と空間であるためには、互いの協力が必要になる。どのような関係性がそれを可能にするかといえは、少なくとも話し手がその人のすべてで「今ここ」において話すという態度が必要になる。

共感や同意の取り付けという意図を伴った技巧的な話は、たとえその人の表している態度が真に迫ったものであっても、想起している過去の感情をなぞった感情的なものではなく、その人の今ここでの感情ではない。ドラマティックに見えて、何

も出来事は起きていない。過去を反復する感情的な声には抑制の色合いが濃い。その人自身の声からは遠い。

(尹雄大『聞くこと、話すこと。人が本当のことを口にするとき』による。ただし、問題作成の上から本文の一部を改めた。)

問1 傍線部A「そうですね!」と「そうですか?」のあいだを縫うようにした「そうですか!」で応えるようにしている」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問2 傍線部B「どちらも私が引つかかるところは音のズレにおいて共通している」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問3 傍線部C「あなたは」そのように言うこと」によって何が手に入ると思っているのでしょうか」とあるが、筆者はなぜそのような質問をするのか、説明しなさい。

問4 傍線部D「それを手に入れることで失ってしまうものがあるとしたら、それは为什么呢」とあるが、筆者はなぜそのような質問をするのか、説明しなさい。

問5 傍線部E「ここでいう繊細さは、互いに言語に依存したゲームを繰り広げるためのものでしかない」とあるが、それはどういうことか、説明しなさい。

問6 傍線部F「完全に聞く」とは相手を完璧に理解することではない。わかろうと試みる状態のことだ」とあるが、それはどのようなことか、本文の論旨を踏まえて説明しなさい。

二

次の文章は、阿仏尼〔うたたね〕の一節である。作者は恋仲であった相手と疎遠になり、とうとう尼寺で出家をしたが、その相手のことを忘れられずにいた。これを読んで、後の問いに答えよ。(30点)

そのころ心地例ならぬことありて、命もあやふきほどなるを、ここながらともかくもなりなばわづらはしかるべければ、思ひかけぬたよりにて、愛宕の近き所にて、はかなきやどり求め出でて、うつろひなんとす。かくとだに聞こえさせまほしけれど、問はず語りもあやしくて、泣く泣く門を引き出づるをりしも、先に立ちたる車あり。前はなやかに追ひて、御前などことごとしく見ゆるを、誰ばかりにかと目とどめたりければ、かの人知れずうらみ聞こゆる人なりけり。顔しるき隨身など、まがふべうもあらねば、かくとは思し寄らざらめど、そぞろに車の中はづかしくはしたなき心地しながら、今ひとたびそれとばかりも見送り聞こゆるは、いとうれしくもあはれにも、さまざま胸静かならず。つひにこなたかなたへ行きわかれ給ふほど、いといったう顧みがちに心細し。

かの所に行き着きたれば、かねて聞きつるよりも、あやしくはかなげなる所のさまなれば、いかにして耐へしのぶべくもあらず。暮れ果つる空のけしきも、日ごろに越えて心細く悲し。宵居すべき友もなければ、あやしく敷きも定めぬ十符の菅菰に、ただ一人うちふしたれど、とけてしも寝られず。

C はかなしな短き夜半の草枕結ぶともなきうたたねの夢

D 日ごろ経れど、訪ひ来る人もなく心細きままに、経つと手に持ちたるばかりぞ、たのもしき友なりける。「世皆不牢固」とあるところをしひて思ひつづけてぞ、うき世の夢もおのづから思ひさますたよりなりける。今日か明日かと心細き命ながら、卯月にもなりぬ。

(注) ○愛宕……現在の京都市東山区あたりの地名。

○御前……貴人の通行を先導する者。

○宵居すべき友……夜ふかしをして語り合える友人。

○十符の菅菰……編み目が十筋ある、菅で編まれた敷物。

○「世皆不牢固」……『法華経』の一節。この世に、かたくてしっかりしているものは何もないという意。

問1 傍線部①～③について、文脈に即してそれぞれ現代語訳せよ。

問2 二重傍線部「ざらめ」について、例にならって文法的に説明せよ。

例 四段活用動詞「なる」の連用形＋過去の助動詞「き」の已然形

問3 傍線部A「かくとだに聞こえさせまほしけれど」について、「かく」の指す内容を現代語で答えよ。

問4 傍線部B「さまざま胸静かならず」とあるが、作者がこのような状況になったのはなぜか、本文に即して説明せよ。

問5 傍線部C「はかなしな短き夜半の草枕結ぶともなきうたたねの夢」とあるが、

1 この歌の句切れとして正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

(ア) 初句切れ (イ) 二句切れ (ウ) 三句切れ (エ) 四句切れ (オ) 句切れなし

2 この歌は、作者の居場所がどのようなものであることをふまえて詠まれているか、説明せよ。

問6 傍線部D「経つと手に持ちたる」とあるが、このような行動をする作者の思いを説明せよ。

問7 『うたたね』と成立時期が最も近い作品を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

(ア) 更級日記 (イ) 十訓抄 (ウ) 大鏡 (エ) 落窪物語 (オ) 太平記

三 次の文章は、木下長嘯子『九州の道の記』（一五九二年）の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。（30点）

さのみ舟のうち、波の上も堪へがたくて、赤間が関に上がりにつけり。ある寺に、先帝の御形並びに一門の公卿、殿上人、局、内侍以下まで、はかなき筆の跡にのみ写し置きたり。世隔たりたることと思へど、その時の心憂さ、沈み給ひしありさままで、数々に思ひ出でられて悲しく覚えければ、

所せく袖ぞ濡れけるこの海の昔をかけし波の名残に

① それより陸路を、駒の足にまかせて急ぎけるほどに、豊前国菊の高浜に泊り侍りしに、海近き所なれば、折節風すさまじう、よもすがら打ちも臥されず侍りしかば、

B 夢にだに都のつてはさもあらで波の音のみ菊の高浜

並びの国筑前箱崎の松原、聞きしより見るはなほ景気ことなり。かの社頭は西面、海辺に向かはせ給ふ。戒定慧の箱埋まれ、しるしに植ゑられけむ松、神さび申すも愚かにぞ侍る。愚詠一首つづけまほしく覚え侍りしかど、所のありさまにけおされて、本意なくやみにけり。C

それよりほど近き博多といふ所に、四、五日ありけるうちに、「袖の湊とことごとしくいはれたるはいづくぞ、尋ね見ばや」と申しければ、主心ある人にて導しけるに、主のいはく、「今こそ潮のさし来て水も少し侍れ。常は無下にいふかひなく候ふものを」とぞ申しける。まことに唐土舟寄せつべき浦とも覚えず。

また、「菅原の大臣住み給ひし宰府といふ所や近く候ふ」と問ひ侍りければ、「これより三里あまりやあるらむ」と申す。「さらばよきほどなり。拝み奉らむ」と詣でて、こなたかなた名所ども見歩きしに、業平の、「色になるてふ」と詠みし染川も、そのかたなく、水さへかれはてて、昔の跡といふばかりなり。

思ひ川、これも聞きしばかりにはあらねど、見所多かり。かの伊勢が、「思ひ川」と詠みたりしも、水無くあせなば口惜しかるべきを、絶えず流るこそ、人の言葉のまこともあらはれて、優には侍れ。

一日、二日ありて、名護屋にまかりけるに、道すがらの名所ども、尋ね問はせければ、「これぞ生の松原とは申す」と言ふ。さることあり。大宰帥隆家、筑紫に下りける時、扇賜はせ給ふとて、枇杷太后宮、「涼しさは生の松原」と詠みし所にぞあなるが、まことに歌人は行かずして名所を知ると諺にいへるがごとく、松原の景気、海に近くさし上がり高き所なれば、涼しかるべき境地なり。

(注) ○赤間が関……山口県下関市の旧称。

○先帝……安徳天皇(一一七八―八五)のこと。

○一門……平家一門。

○かの社頭……福岡市東区にある筥崎宮のこと。

○戒定慧……仏教の実践の三大綱要である「戒律」「禪定」「智慧」。

○袖の湊……博多港の古名。

○唐土舟寄せつべき浦……「思はず袖に湊のさわぐかな唐土舟の寄りしばかりに」(伊勢物語・二十六段)をふまえる。

○菅原の大臣……菅原道真(八四五―九〇三)のこと。

○宰府……福岡県太宰府市にあった西海道の総管府。

○「色になるてふ」……「染河を渡らむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ」(伊勢物語・六十一段)。

○「思ひ川」……「思ひ川たえず流るる水の泡のうたかた人にあはで消えめや」(後撰和歌集)。

○大宰帥隆家……藤原隆家(九七九―一〇四四)。道隆の四男。長和三(一〇一四)年に大宰権帥。

○枇杷太后宮……枇杷皇太后宮(九九四―一〇二七)。藤原妍子。道長の二女。

○「涼しさは生の松原」……「涼しさは生の松原まさるともそふる扇の風な忘れそ」(新古今和歌集)。

○境地……場所。

問1 傍線部①・②について、文脈に即してそれぞれ現代語訳せよ。

問2 傍線部A「この海の昔」とあるが、その具体的な内容について、本文をふまえて説明せよ。

問3 傍線部Bの和歌について、

1 この歌で用いられている和歌の表現技法について説明せよ。

2 歌全体を現代語訳せよ。

問4 傍線部C「本意なくやみにけり」とあるが、なぜそのような状況になったのか、説明せよ。

問5 二重傍線部「染川」「思ひ川」について、作者はどのような評価を下しているか、本文に即して説明せよ。

問6 傍線部D「歌人は行かずして名所を知る」とあるが、ここではどのような内容を指しているのか、説明せよ。

四

次の【文章Ⅰ】は歴史書『三国志』、【文章Ⅱ】はそれに付された注（異聞録）である。二つの文章を読んで、後の問いに答えよ。
なお、この文章には設問の都合で返り点・送り仮名を省略した部分がある。（45点）

【文章Ⅰ】

劉備東伐吳、吳王求和、瑾与備箋。時或言、「瑾別遣親人与備相聞。」^{コユト}權曰、「孤与子瑜有死生不易之誓、^㉑子瑜之不負孤、猶

孤之不負子瑜也。」

【文章Ⅱ】

『江表伝』曰、瑾之在南郡、人有密讒瑾者。此語頗流聞於外。權報曰、「子瑜与孤從事積年、恩如骨肉、深相明究。其為人非道不行、非義不言。玄徳昔遣孔明至吳、孤嘗語子瑜曰、『卿

与^ニ孔明^一同^{ナリ}産、且^ツ弟^フ随^ハ兄^ニ、於^{ヒテ}義^ニ為^リ順。何^ヲ以^テ不^レ留^メ孔明^ヲ。孔明^②若^カ留^{マリテ}
 從^{ハバ}卿^ニ者、孤^③当^ニ以^テ書^一解^レ玄^ニ德、意^{おもフニ}自^ラ随^フ人^ニ耳。』子瑜^{ヘテ}答^レ孤^ニ言、『弟^フ亮
 以^テ失^ヒ身^ヲ於^ニ人^一、委^{ゆだね}質^ヲ定^メ分^ヲ、義^ニ無^シ二^一心。弟^ニ之^ハ不^レ留^{マラ}、猶^ニ瑾^一之^ハ不^レ往^カ也。』
 其^ノ言^ヲ足^リ貫^{クニ}神^ヲ明、今^ニ豈^ニ当^ニ有^ル此^{ケシヤ}乎。孤^ニ与^ニ子瑜^一、可^シ謂^フ神^ニ交^ト。非^{ザル}外^ニ言^ノ
 所^ニ間^{スル}也。』
 ④ ⑤

(『三国志』および注による)

(注)

劉備 後漢末、三国時代の人物。四川の地に蜀を建国した。

呉 国名、三国の一つ。

呉王 呉の王、孫権。

瑾 孫権の臣下、諸葛瑾。

箋 手紙。

孤 わたし。

子瑜 諸葛瑾の字。

『江表伝』 書名。

南郡 地名。

明究 理解する。

玄德 劉備の字。

孔明 劉備の臣下、諸葛亮の字。

同産 兄弟。

委質 礼物を捧げ、仕官する。

定分 主と臣下の身分を定める。

神明 天と地の間に存在する神。

神交 心からの交わり。

問1 傍線部①「子瑜之不負孤、猶孤之不負子瑜也。」について、

(1) 書き下し文に改めよ(現代仮名づかいでもよい)。

(2) 孫権はどのようなうわさに対してこのような事を述べたのか説明せよ。

問2 傍線部②「何以不留孔明。」について、孫権はなぜ諸葛瑾ならば孔明を呉に引き留められると考えているのか、本文に即して答えよ。

問3 傍線部③「孤当以書解玄德」は、「孤当に書を以て玄德を解くべし」と読む。この書き下し文に従って、解答欄の白文に返り点を記せ。

問4 傍線部④「其言足貫神明、今豈当有此乎。」を、「其」と「此」が指すものを明らかにして現代語訳せよ。

問5 傍線部⑤「非外言所聞也。」について、孫権がどのように言うのは、諸葛瑾をどのような人物と考えているためか、わかりやすく六十字以内で述べよ。

問6 波線部a「不易」、b「為人」、c「若」の読み方を、送り仮名も含めてすべてひらがなで記せ(現代仮名づかいでもよい)。

問7 後漢・三国時代に活躍した人物を、次の(ア)～(ク)の中からすべて選び、その記号を記せ。

- | | | | |
|--------|---------|--------|----------|
| (ア) 蘇軾 | (イ) 曹植 | (ウ) 班固 | (エ) 屈原 |
| (オ) 王維 | (カ) 司馬光 | (キ) 阮籍 | (ク) 昭明太子 |